

## アダム・スミスの本能論——経済学の生物学的方法と「自然の秩序」

高 哲男(九州産業大学)

本報告の課題は、アダム・スミスの思想・経済学は、ニュートン力学の方法に依拠してはいるが、むしろ生物学的な科学として構築されたと理解するほうが思想史上の位置と特徴をより明確に把握できる、ということ。「本能」概念への着目をつうじて指摘することである。

自然価格論や市場メカニズムの理解の仕方がニュートンの力学的方法に依拠しているという解釈は、通説と言ってよい。だが、フランスから帰国後の6年間、諸国民の富に関する研究に集中する傍ら、「それまで真剣に目を向けたことがなかったいくつかの他の科学にくわえ、植物学を研究（しかし、これはそれほど進歩しませんでした）して過ごしました」(Letter to A. Holt [1790], Smith 1977, p.252)という、従来ほとんど研究者の関心を惹きつけなかった事実がある。ここに注目すれば、『諸国民の富』を貫く方法が並行的に研究されていた植物学や他の科学のそれと深く関連していたであろうことは、容易に推測がつく。だが、この時期スミスが研究した「植物学」の中身を、正確に知る手立ては少ない。スミスの蔵書の中に生物学関係書がかなり含まれているが、著作の中での明示的な言及はリンネ、ビュフォン、ドバントン、レオミュールなどに限られている。まずそれを確認しよう。

### I

「エジンバラレビュー同人宛の書簡」のなかで、スミスはフランスにおける自然史研究の隆盛に言及し、ビュフォンについて、植物の組成、動物の発生、胎児の発達、感覚器官の発展などについて、なお「仮説的」とはいえさまざまな彼独自の観察や実験に基づいて一般理論を提示した点を評価しているし、叙述の明瞭さと妥当性の点でドバントンに言及している。だが、レオミュールによる刊行中の大著『昆虫の歴史』が、「比類なく完璧にちかく、高度な観察技法を駆使したこのような小さな動物の組織と管理能力(oeconomy and management)に関する注意深い観察」であるばかりか、「無垢な好奇心と純真な喜びをもってなされた観察と実験」であるとさらに高い評価が与えられ、それは「科学情報の共有財産the public stock of observations」の増加に直接寄与するだけでなく、「すでになされた観察をよりいっそう補完し、より適切な体系に整序する」際の基礎になると指摘されていることの方が(以上、Smith [1955-56]1980, LER.8-19)、科学方法論の観点から見ると、むしろ興味深い。

他方、リンネは、「外部感覚について」で検討された五感つまり触覚、味覚、臭覚、聴覚、に続く最後の節「視覚について」の後半(Smith [1795]1980, ES)で言及されるが、ビュフォンやレオミュールの場合と違い、リンネによる「種」「属」「目」の動植物分類の成果が直接利用されている。しかも、そこは、チェスルデンによる白内障手術の結果についての議論を媒介項にして、いわゆる「視覚」に関する前半の考察から、「すべての経験に先立つ」本能的知覚、本能的先入観や本能的示唆といったものが存在すると判断せざるを得ない、という後半独自の議論が開始される箇所である。リンネの分類に従いながら人間と幼児や大部分の動物の子の行動を観察し、「地上に巣を作る鳥」の場合には生後すぐに精巧な視覚を得て餌を啄ばむとか、「高所や絶壁などに巣を作る鳥」の場合には「しばらく目が見えず、両親が共同で給餌する」事実注目して「本能的知覚instinctive perception」の存在を導出し、程度は低くても、人間の子供

も同様にこの種の本能的知覚を持っていると信じたいとなるとスミスは言う。彼は本能という見地から味覚、臭覚、聴覚について改めて検討しなおし、「すべての観察と経験に先立つ」本能的知覚（本能的先入観、本能的示唆）の存在を疑いえないものとして論証していく。途中で食欲や性欲が本能的なものと言及したりするが、その要点はこうである。

自ら動く能力を持ち、快適であるか不快であるか、つまり一方の側が他方の側よりもより暖かいとか冷たいかを自分の体で感じる動物の新生児は、本能的に、すなわちあらゆる観察と経験に先立って、快適感のある側に向かって動き、不快感のある側から遠ざかろうと努力するように思われる。だが、動こうとする欲求そのものが外部性について一定の観念または先入観の存在を前提する。つまり、快適感のある側に動こうとしたり不快感のある側から遠ざかろうとする欲求は、このような二様の感覚作用の根拠である外部的なモノや場所について、少なくともある漠然とした観念を仮定しているのだ。(Smith [1795]1980, ES.85)

だが、「本能」概念は、たんに生物学的なもの（現在の生物学では、あいまいであるという理由から本能という用語はあまり使われない）を意味するわけではない。そもそも「感覚sense」それ自体が心理学の問題であり、内と外の区別にかかわる認識論の問題であるから、ロックもヒュームも、当然「本能instinct」について言及していた。もっとも、ロックの場合、初期には「衝動」とか「扇動」という意味でinstinct(instinctu)が用いていたが(cf. Essays on the Law of Nature)、『人間知性論』では、「生得的な実践原理」とか「生得的な自然法」という概念についての認識があるとはいえ、instinct つまり「衝動」は、「同情や反感という言葉と同様にあいまいな内容」(Locke [1693]1995,414)だと示唆する箇所ですでに使われるに留まる。他方ヒュームは、『人性論』の中で、人間も動物も「本能」を持つということを頻繁に指摘する。しかもa kind of instinct or natural impulse とかoriginal and natural instinct という表現から分かるように、ロックに較べればはるかに「生得的な感覚」に近いのだが、なお基本的に動物でも持っている「衝動」とか「扇動」という意味で用いていると言ってよい。「外部感覚について」におけるスミスの「本能論」は、著しく生物学的であり、現代的な認識であることが分かる。

## II

しかし以上の「本能」あるいは「本能的」という概念に関する考察は、執筆時期も執筆意図も明確に特定されていない「外部感覚について」が中心である。生前に刊行された著作に限定して再検討する必要があるだろう。「エジンバラレビュー同人宛の手紙」では次のように言う。

両者[ルソーとマンデヴィル]は共に、人間は仲間との交友societyそれ自体を絶えず求めるように促す強力な本能を持っていない、と想定している。したがって前者は、原始状態が悲惨であるからこそ、他の場合なら決して同意し得ないような矯正手段の採用が人間に強いられるのだと説明するし、後者は、何らかの不運な出来事が、それまで人間がまったく知らなかった不自然極まりない功名心という欲望や虚栄心に基づく優越への願望を生みだし、結果的に同様の致命的な結果を生み出したと説明するのである。・・・両者の考えによれば、現在人類の間に存在する不平等を擁護している正義の法律というものは、もともと集団構成員に対する不自然で不当な優越性を獲得し維持するための発明であった、ということになる。

(Smith [1755-56]1980, LER.11)

「本能」に関する自らの主張をポジティブに述べたところではないから即断はできないが、ヒューム的な意味での「衝動」とどまらないことだけは確かである。さらに、『道徳感情の理論』でも表現の仕方こそ異なるが、「同人宛の手紙」と同一の内容が引き継がれている。

人間は、社会の繁栄と存続を自然に望むような資質を付与されているが、自然の創造主がそのような資質を人間に付与したのは、この所期の目的を達成させる適切な手段が一定の刑罰を与える事だ、と理性を働かせて理解させるためではない。逆であって、所期の目的を最も上手く達成するような努力を、直接本能的に賞賛するような資質を与えることによってなのだ。自然の秩序 the oeconomy of nature は、この点で、多くの他の事例で生じる事と完全に一致している。・・・このように自然は、自然が提示した目的を自ら喜んで追求するような資質をつねに人間に授けてきたばかりか、同様にまた、その手段に頼りさえすれば、手段それ自体がひとりでに、しかもそれを生み出すための手段自体のもつ傾向とは無関係に、この目的を実現できるような資質を人間に授けてきた。要するに、自己保存すなわち種の増殖は、自然があらゆる動物を育む際に企ててきた偉大な目的であった、と思われる。(Smith[1759]1976, II.i.5.9)

ここには、二つの注目すべき主張が含まれている。第一に、刑罰を手段に人類の存続と発展を図らせるのではなく、所期の目的を上手く達成する努力を直接本能的に賞賛する資質を与えることをもってする「自然の創造主」の意図こそ、完全に「自然の秩序」と一致しているというスミスの主張は、マンデヴィルとルソーの主張に対する根本的な批判である。先に指摘したように、両者は真反対の「自然状態」を想定しておきながら、結局両者が共通に引き出した結論はといえば、「正義の法」というものは、不平等を擁護し不自然で不当な優越性を獲得・維持するための発明であったという点で共通している。スミスの批判は「自然状態」の想定に対して向けられるだけでなく、正義の法の理解にも向けられるが、しかし、この批判を支えているのが、生命体には種の存続という目的の達成を「本能的に賞賛する資質」が普遍的に存在するという認識であることに、かわりはない。そして第二に、ここで言及されている「本能」概念が、『道徳感情の理論』第6版においてもなお「生得的な」特徴と理解され続けていたことである。第6版で追加した箇所スミスは言う。

幼児には、話されたことをすべて信じるという本能的な気質があるように見える。自然は、幼少期の間面倒を見てくれ、最初期のもっとも不可欠な部分となる教育をしてくれる人に対して、少なくともしばらくの間、絶対の信頼を寄せることが幼児の自己保存にとって必要である、と判断したように思われる。それゆえ、幼児の信じ易い性質は度を越えており、彼らに謙虚さと疑念を適度に身につけさせるためには、長くかつ多大な人類の欺瞞という経験が欠かせなくなる。(Smith [1759]1976, VII.iv.23)

こうして「本能」あるいは「本能的な」という概念が1790年の『道徳感情の理論』第6版まで保持されていた事実は明らかになったが、中間に執筆された『諸国民の富』では、「本能」という概念そのものが一度も使われない。放棄され<sup>(た)</sup>かどうか、立ち入って考察しよう。

『諸国民の富』第一篇2章の冒頭には、「交換性向the propensity to truck, barter and exchange」という概念が登場する。「分業とは実に多くの利益を引き出してくれるものだが、もともとこ

れは人間の英知——それがもたらす一般的な富裕を予見したり意図したりするような英知——の産物ではない。それは、そのような広範な有用性など思いつきもしないような人間性のうちのある性向がもたらす必然的な帰結であって、あるものを他のものと取り引きし、やり取りし、交換するというこうした性向が極めてゆつくりと、徐々に作り上げたものなのである」(Smith [1776]1976,I.ii.1)というからである。さて、「性向」と「本能」はどのように区別されているのだろうか。手がかりは、続くパラグラフの「このような性向が、ここではこれ以上詳論しえない根源的な人間性に属するものか、あるいは理性と言語能力の必然的な帰結であるのか」という大いにありそうなことも、当面の研究課題ではない」(Smith [1776]1976, I.ii.2)という指摘の中にある。

スミスが「本能」という場合、さきに考察した「外部感覚」論から明らかなように、程度に違いはあっても他の動物と共通な生得的なものが意味されている。他方『諸国民の富』では、「人間であれば普通に見られるが、他の動物種ではまったく見られない」交換性向の認識と並んで、「仲間の好意をえるため、ありとあらゆる卑屈で媚びへつらうような献身的な振る舞い」をする人間と犬の間にみられる共通点が、明確に指摘されている(Smith[1776]1976,I.ii.2)。むしろ「本能」であるのは後者であり(スミスは、「人間は仲間との交友societyそれ自体を絶えず求めるように促す強力な本能を持つ」と考えていたふしがある)、前者つまり「交換性向」は、「仲間の好意を得るために献身的な振る舞いをする」本能にもとづくとはいえ、人間だけにみられる特徴と理解されている。そうであるかぎり、「交換性向」という概念が新規に採用されたとはいえ、なお『諸国民の富』でも「本能」概念は基本的に保持されていると考えてよい。『諸国民の富』は、生物学的(動物行動学)な意味での「本能」概念を基礎に、あくまでも「人間特有の特徴」に焦点を絞った「自然の秩序the order of nature, oeconomy of nature」の解明であったということになる。だが、人間独自の特徴は「交換性向」だけではない。

あらゆる人間がもつ己の経済状態を改善しようという一様で粘り強く、しかも妨げられようのない努力——すなわち、個人的な豊かさはおろか、社会と国民の豊かさも、そもそもそこから引き出される——この原動力principleが十分に強力だったから、政府の乱費や統治の大失敗の両方が生じたというのに、絶え間のない自然な進歩が実現されたのである。それは、動物がもつ未知の原動力と同様に、病気はおろか、医者が処方間違えた場合でも、しばしば肉体に健康と活力を回復させるものなのだ。(Smith[1776]1976,II.iii.31)

ここでスミスが言う自己保存＝種の増殖という「大目的を達成するのに最適な努力を直接本能的に賞賛するような資質」は、「動物が持つ未知の原動力」と同列に置かれているが、それが生活必需品と便宜品をもたらす元本である「労働」＝「勤勉」であることは想像に難くない。

節約は、勤勉と違って、資本を増やす直接の原因である。はっきり言えば、節約によって蓄積される対象を生み出すのが勤勉なのである。だが、勤勉によって何を獲得しようと、節約によって蓄えられ蓄積されなければ、資本は決して増大しえないであろう。(Smith[1776]

1976, II.iii.16)

資本の蓄積をもたらすような「節約」は、人間だけにしかできない。人間以外の動物はけっして「政府の乱費や統治の大失敗」からくる浪費を引き起こさないが、人間以外の動物が「節約」

して資本の蓄積を行うことはない。蓄積の対象物を生み出す勤労も、その意味では、同様に人間だけに限られた特質である。『諸国民の富』でスミスがいう「勤勉と節約」は、明らかに人間に固有な「原動力」と理解されている。

このような意味で、交換性向と、経済状態を改善しようとする努力——すなわち人間の場合には「勤勉と節約」として顕在化する「自然があらゆる動物を育む際に企ててきた偉大な目的である」「自己保存すなわち種の増殖」を実現するための努力——は、ともに人間に限って現れる「本能的」なものと理解されているわけだが、しかし、両者は本質的に異なる性質のものである。前者つまり第一篇の「分業」をもたらす交換性向は、「仲間の好意をえる」という社会的動物に固有の本能(仲間との交友それ自体を求める本能)に基づいているという意味で「関係的」であり「外部的」な性質のものであるが、「勤勉と節約」は、あくまでも「個別的」であり「内部的な」性質のものである。『諸国民の富』の構成を見ると、関係的で外部的な原理・原動力として機能する「交換性向」にもとづく経済発展の特徴の分析と叙述に第一編が当てられ、個別的で内部的な原理・原動力として機能する「勤勉と節約」、つまり人間の理性や合理性にもとづく経済発展の特徴の分析と叙述は、第二編に置かれる。この構成は、スミスがいかに関係的で外部的な、つまり社会的な人間存在の特質を重要視していたかを物語っている。

もちろん、それだけが理由ではない。「序と全体の構想」のなかでスミスが、「あらゆる国で労働が実際に用いられる際の技能、技量や判断力がどのような状態にあらうと、それが同じ状態つまり同じ水準にとどまるかぎり、国民の年間供給量が豊富であるか不十分であるかを決定するのは、有用な労働に年間用いられる人間の数とそのように用いられない人間の数との比率だけだ」と述べていたことから分かるように、『諸国民の富』の構成は、生産的労働と不生産的労働の割合つまり「勤勉と節約」がもつ効果よりも、「分業」——交換性向によって直接引き起こされる分業——の効果のほうが、富裕の進展のためのより大きくかつ本質的な推進力である、という基本的認識の反映でもある。だが、『諸国民の富』のいったい何処が生物学的認識なのか、となお疑問に思われるかもしれない。以下、若干の事実を指摘しておこう。

### III

第一編11章に含まれる「銀価値の変動に関する余論」の「結論」で、スミスは言う。「ジャガイモとトウモロコシ、つまりインディアン・コーンと呼ばれているものは、ヨーロッパの農業、すなわちヨーロッパ自体が商業と航海の大拡張[アメリカ大陸の発見のこと——引用者]から受け取った恐らく二つの最も重要な改良である」(Smith[1766]1976,I.xi.n.10)。

そもそも「余論」は、新大陸発見後に生じた銀の大量輸入の影響つまり前後ほぼ4世紀にわたるヨーロッパの経済発展の原因・結果を究明するために書かれ、基本的にそれは、銀価値の大量輸入＝物価の上昇ではなく、土地の耕作の進展と製造業における生産性の上昇と自由の進展に基づく市場＝需要の拡大にあった、と主張されたところである。スミスは、「哲学は自然のさまざまな結合原理をめぐる科学である」(Smith[1795]1980,HA.12)とか、「哲学、すなわち世界で起きているさまざまな変化を全体として結び付けようと努力する科学」(Smith[1795]1980,ALM.1)であると考えていたから、「余論」は、「人間の想像力が慣習にしたがって自然にそう考えてしまう」ヨーロッパにおける「貨幣の増加」と「富裕の実現＝経済発展」という

二つの現象が「事物の自然の経路に完全に従っていて、それらを結びつけるための中間的な事柄など必要ない」と切り捨ててきた皮相な「自然の体系system of nature」の理解を、根底的に批判・検討するために書かれたという特徴を持つ。その骨子は、以下のようにまとめられよう。

未発展の社会段階では、猟師や猟師が提供する食肉が「多く存在する」＝低価格である。食肉が維持・扶養しうる労働量は小さいが、食肉を入手するために必要な労働の量もまた小さい。人口密度が極めて希薄な未開社会段階である。改良と耕作の進展によって穀物生産が増えると、穀物が維持・扶養しうる労働量は食肉のそれよりも大きいから、食料が維持しうる労働量つまり人口は加速度的に増加する。だが、維持しうる労働量の劣る食料である食肉に対する需要がやがて増加し、高価格になる。食肉が「贅沢品」になる。この穀物と食肉との間に成り立つ関係は、土地利用に代替性をもつ他のすべての土地生産物について成立し、人間は、穀物だけを食べて肉体と健康を十分維持できる。この生き方を選択すれば、労働は限りなく短縮されるが、人間はより多くの物質的な幸福の追求を止めないから、必需品の生産性が向上した分だけ贅沢品や奢侈品の生産と消費が増加し、人口も増える。分業の導入は農業より製造業の方が容易であり、生産性向上のスピードが速いから、製造品価格は急速に低下しつづけ、贅沢品であったものが次々と必需品に組み込まれていく。結果的に、衣・食・住という必需品の大衆の消費が進み、まさに豊かさが社会的に実現されてくるが、この経済発展の経路の中では食料価格が相対的に大きく上昇するはずである。この価格上昇を相殺したのがジャガイモとトウモロコシの導入であった。水分含有率がおおきとはいえ、「1エーカーのジャガイモ畑は栄養の中身で換算しても、小麦畑の3倍の量を生産する」(Smith [1776]1976, I.xi.b.39)から、ヨーロッパの経済発展を一段と加速できたという指摘である。土地単位あたり・投入労働量単位あたりの食料産出量と単位あたりの食料の栄養(カロリー量)に注目して組み立てられている点で、まさに生物学的な「自然の秩序(機構・営み・摂理) oeconomy of nature」の理解と言ってよい。

#### IV

だがそうとすれば、スミスの言う「自然の秩序」と科学の関係について、さらに興味ある事実に気付くことになる。積み上げられていく「経験と観察」にもとづく知識の総体が生産性の普通の向上の源泉であるという理解は、力学的なシステムの発展と応用が生産性の向上をもたらすという常識的な理解を超えている。『諸国民の富』の自然価格論に着目するだけなら、経済社会を力学的なフィードバック・システム(自立的なシステム)と理解したという解釈も正しい。だが、経験と観察にもとづく社会的共同知識としての科学は、「無垢な好奇心」の発揮・発現が許されるなら、観察的知識の全体が形式論理的に統一されてある特定の「体系」(クロードシステム)に閉じ込まれないかぎり、無限に累積・増大しつづけるから、生産性も無限に増加し続ける。知識のシステムも経済のシステムも、ともに拡大し続ける(ポジティブ・フィードバック)のであり、そもそも発展の理論は、オープンシステムの理論でなければならない。科学の発展とは、人間が「共有財産」である知識のシステムを観察の精緻化をつうじて「自然の秩序」に合致するように書き換え、豊富化していくことなのだ。こう理解してはじめて、『道徳感情の理論』における「体系の精神spirit of system」や「体系の人」に対する厳しい批判(Smith[1759]1976, VI, ii.2.15-17)の持つ意味が十分に理解できるようになると思われる。